

7.11 悲劇くり返すまい

西穂落  
雷難

遺族らが追悼登山

八月はじめ北ア西穂高岳で集団  
登山の途中、落雷に打たれて遭難  
した松本深志高校生の母親など遺  
族二十四人が、十日遭難現場の独

標まで追悼登山し、花やくだもの

などをして愛児や兄弟の靈を

なぐさめた。この追悼登山には松

本深志高校の職員十人、医師二

人、山岳部の生徒四人も同行し、

このよつば悲惨な事故が二度と起  
きないよう、深く黙とうをさけ

た。

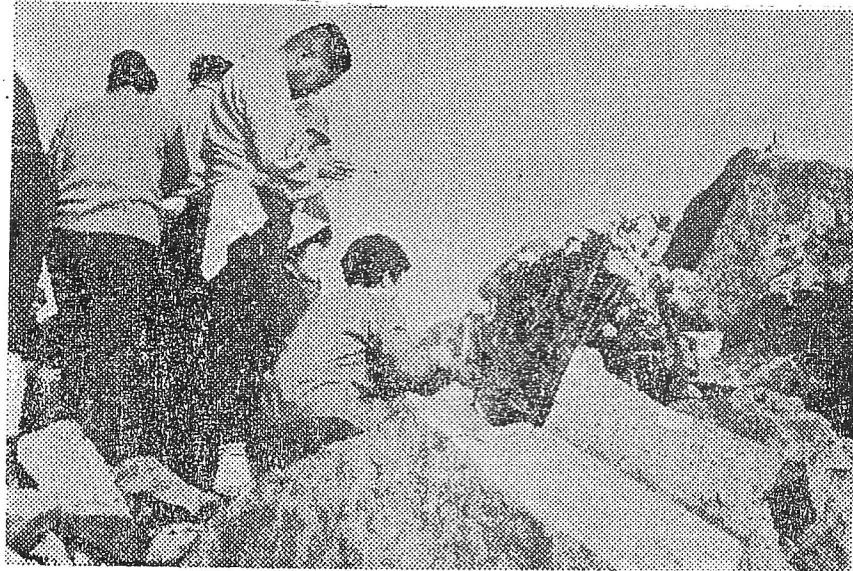
中条寛樹君の父、嘉門さん(＊)  
、島田利夫君の妹、恭子さん(＊)  
なども含めた一行は、九日西穂  
山莊に泊まり、十日午前八時ご  
ろ、山莊の主人、村上守さんに案  
内され、現場の独標へついた。  
「ひじで私の子供が死んだのが」

ど現場へついたとたんにすわり  
こんでしまう母親。一行が小屋を  
出るところから、深かった霧も消え  
はじめたが、見えがぐれする空

岳、壁岳、それに穂高の山々を見つ  
め、くちびるをかみしめ涙をこら  
えながら愛児をじのぶ父親もあつ  
た。遺族の一人一人が遺体のあつ



た場所に村上さんの案内で花束や  
線香をあげ、「靈安らかに」と祈  
った。遺族たちは「こんな事故が  
なければ、ここで寝ることもな  
かつただろう。これからは力の続  
く限り、毎年一度ほどの山にきて  
子どもたちをしのびたい」といっ  
て言った。



独標で花束をそなえ、靈を慰める遺族たち

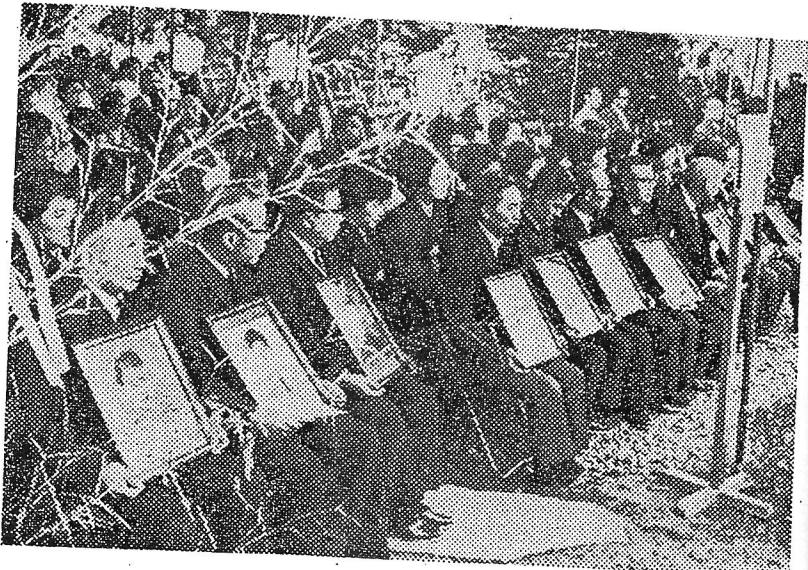
# 悲しみも新た

松本深志高の西穂遭難一周年

遺族ら出席して追悼式

昨年の北ア西穂高落雪遭難からちょうど一周年を迎えた一日、松本深志高校で西穂遭難一周年追悼式典がおこなわれた。

この日は、死亡した十人の生徒の遺族ら八十六人をはじめ、同校生徒職員約八百五十人、同窓会、PTAのほか、西沢知事代理長、警察、自衛隊の代表ら来賓約



わが子の遺影を胸に追悼式に参列した遺族

五十人が参列。午前十時から同校講堂前に完成した西穂遭難慰靈碑の除幕式がおこなわれた。

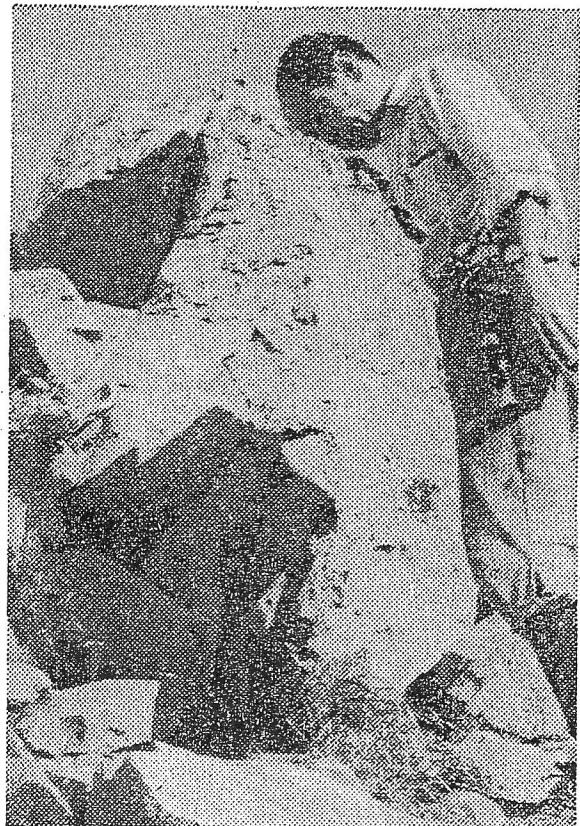
式は神事で始まり、遭難した故小林太郎君の父親、小林唯雄さんが遺族を代表して慰靈碑の前の綱引き、除幕をした。このあと伊沢校長が「世に例のない災害を負った悲しみを、多くの人たちの励ましで耐えてきた。追悼文集もでき、慰靈碑の除幕がじきにことを」と語った。

来賓を代表して西沢知事のあいさつ(代読)があつたあと、遺族

を代表して故中条寛樹君の父親、中条寛門さんが「わが子たちは、肉体的には成長が止まつたが、生徒のみなさんの心のなかでたくましく生き続けている。みなさんも元気を出して勉学に励み、死んだわが子たちをもとい成長させてほしい」とあいさつし、改めて参列者の涙を誘つてみた。

# 西穂独標に祈り

深志高生落雷遭難11年



追悼にやさしきたのは、松本市埋蔵・深志高校教諭小林俊樹さんら。小林さんは、四十二年の事故で救助活動にあたったが「悲劇が二度と起きない」ので、「」と、毎年八月一日には独標を訪れている。りょう線の四力所には、数日前からビスケット、花などが供えられていた。一方、松本深志高では、一日午後、モニーメント前で十一回目の慰靈式が行われた。遺族ら約三十人のほか、夏代みの補修授業で登校した在校生三

百人が西穂に向かって金賞で黙とうをささげた。

西穂は、穗高連峰の中では初心者向きのコース。岐阜側からはロープウェーで気軽に入山できる。だが、その日の天候を気にせず装備も不十分な者、ハイキングのつもりでやまといふ県外の学生登山者、深志高の遭難以来、県内の学生集団登山は安全に特に気をつけようになつたが、事故があったことすら知らない県外の集団登山もある。

確かにこの十年間落雷による山の事故は少ない。しかし先月二十八日、槍ヶ岳に登っていた東京の中学生パーティー約五十人が落雷に遭い、手にやけどをした生徒が出た。黒い霜の真、佐久地方で雷の犠牲者が続出しただけに、山小屋などは、「とにかく朝の天気をよく判断してほしい」と警戒している。

(大田川村) 特集

# 今年も追悼登山

学校で  
慰靈式

北ア・西穂高岳独標で松本深志高生一人が落雷のため遭難死じたのが1966年だが、今年も、同校教師らの追悼登山が行われた。遭難現場にむけられた花がりょう線を行く登山者びしの姿を呼びかけているのがやめだった。

西穂は、穗高連峰の中では初心者向きのコース。岐阜側からはロープウェーで気軽に入山できる。

だが、その日の天候を気にせず装備も不十分な者、ハイキングのつもりでやまといふ県外の学生登山者、深志高の遭難以来、県内の学生集団登山は安全に特に気をつけようになつたが、事故があったことすら知らない県外の集団登山もある。

確かにこの十年間落雷による山の事故は少ない。しかし先月二十八日、槍ヶ岳に登っていた東京の中学生パーティー約五十人が落雷に遭い、手にやけどをした生徒が出た。黒い霜の真、佐久地方で雷の犠牲者が続出しただけに、山小屋などは、「とにかく朝の天気をよく判断してほしい」と警戒している。

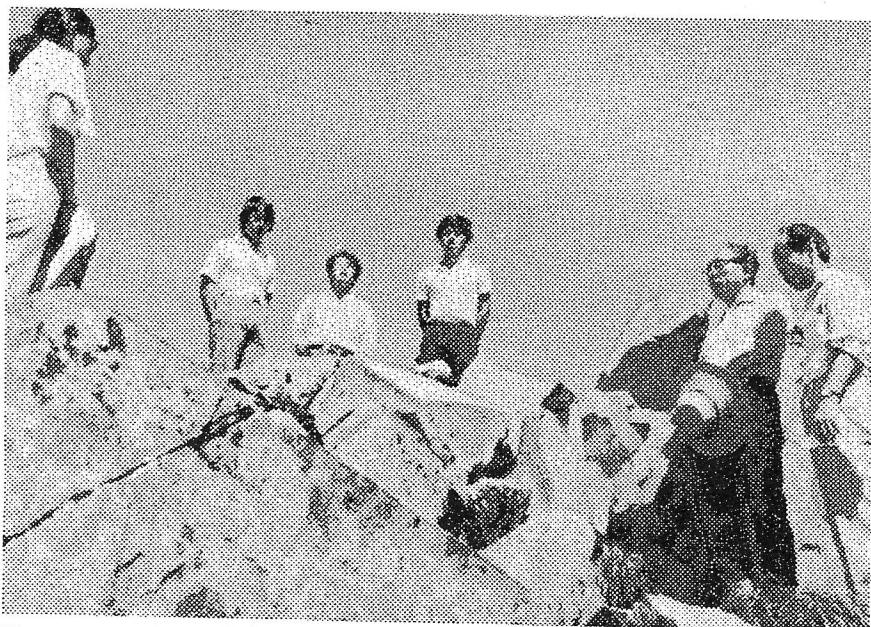
## 濃海日新報

## 独標に悲しみ新た

深志高落雷  
遭難13回忌 校庭でも慰靈式

「十一の御靈よ永遠に」。四十  
二年に北ア西穂高岳独標で起きた  
松本深志高校生の落雷遭難事故の  
十三回忌にあたる一日、現地と松  
本深志高校の落雷遭難事故の  
われた。この日の独標は、快晴で  
若い人たちでぎわつたが、校歌

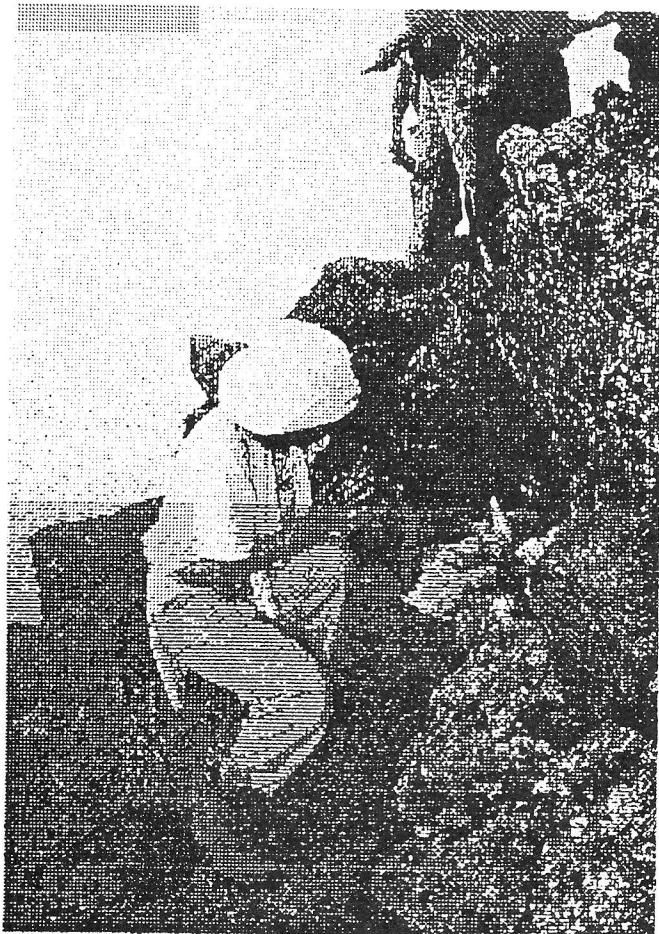
などが穗高連峰に流れるといは  
静寂に包まれた。  
この日独標での式に参加したの  
は、鈴木脩同校校長、小林俊樹教  
諭、昨年同校を卒業した学生ら七  
人。午前九時過ぎ、岩場の一角  
に、白と黄の菊が飾られ、一人一  
人が線香をあげて合掌。一分間の  
黙とうの後、校歌などを合唱し亡  
き友をしのんだ。



晴れ上がった独標で、犠牲者をしのび校歌などを齊唱する関係者  
松本深志高の前庭にある慰靈碑  
前には、遺族やかつての同級生、  
教職員、夏季特別講座や運動クラブの練習に出ていた在校生ら約三百人が参列。午後一時四十五分、  
西穂高岳の方向を向き全員で黙とう。続いて、それぞれの代表が慰  
靈碑に献花。遺族代表の折井親市さん(六〇)、松本市埋橋一郎が「こ  
ういうことを契機に、山へ行つても慎重な行動を」と悲しみも新たにあいさつした。  
一人息子の博親君をなくした折井さんは「十一人のうち五人が一人息子。生きていれば三十歳近くになり、孫もできているだろうに」と思い出されて、毎月一日にはだれかどうかが慰靈碑に花を供えてるんですよ」と話していた。

第三種郵便物認可

## 松本深志高 落雷遭難から30年



あれから30年。松本深志高生落雷遭難事故の犠牲者のめい福を祈る同窓生ら

## 西穂へ慰靈の登山

北アルプス・西穂山頂出発で一九六七(昭和四十二)年、集団登山の松本深志高校(松本中)二年生十一人が死亡した落雷遭難事故が三十年前の一四日、同校の青山誠教頭や同窓生ら五人が慰靈登山をし、めい福を祈った。同校では慰靈祭を開いた。開会式の胸に

「正社員」と、何回か初めてこの同市蟻ヶ崎、新村小白合さん(当時)一同内

慰靈登山は三十年前の後一時四十分後、西穂高岳からの下山途中、独標下

集団登山に参加した同市横田智三、畠内多賀子さん(当時)

「正社員」と、何回か初

めてこの同市蟻ヶ崎、

新村小白合さん(当時)一同内

事故は三十年前の一四日、當時現場にいたメンバーは「あれなかった」。

川の足窓生一人も参加。

畠内さんは「三十一年間、怖

わっていない感じです」。

北側斜面の岩場にコリな

どの花を手向け、十一人の

若い魂に祈りを述べた。

「當時現場にいたメンバーは

を説いたけど、絶対行かな

いと強張っていた。それ

ほど心の傷は深い」と語る

新村さん。畠内さんは「」

「おじローブウェード簡単

に登れるようになった。そ

んなに立派に来ていい場所

なのかどうか…」。

## 忘れられない 痛み込み上げ

で雷雨に見舞われた。畠内さんは山頂まで行かず、「さき返した組、山莊で遭難の知らせを聞き、骨折用の添え木を持って向かった。無我夢中で他のことは覚えていない」。その独標にのぞむ、「その後一時到着。雪づけにす」と漏らした。

同校での慰靈祭は、遭難の悲劇を伝えるモニュメント前で、遺族や同窓生、在校生の約八十人が出席して黙じてささげた。遺族会長の小林唯雄さん(当時)同市岡田さんは、毎年足窓生の姿を見ると、生きていればこのくらいかなあと想い、つづく。OBの浜重俊さんは、「同市横田一は、三十年目ところに出席者が少ない。時の流れを感じます」と漏らした。

# 「あの日」を忘れない



松本深志高校の落雷遭難事故から40年。北アルプス・西穂高岳独標付近(二、七〇一五)

## 松本深志高 落雷遭難から40年

北アルプス・西穂高岳独標付近(二、七〇一五)  
で一九六七年(昭和四十二年)、集団登山中の松本深志高校(松本市)二年生が落雷に遭い、十一人が死亡、十三人が重軽傷を負った遭難事故から一日で四十年がたつ。現場では、同校の同窓生や坂巻道弘校長らが慰靈登山をし追悼。同校でも、遺族や同期生らが慰靈碑の前で手を合わせた。

### 20人が追悼登山

午前十一時すぎ、独標富士山までも見渡せる真東側斜面の岩場で行つた。背中から右足にかけた。雷が走り、はじき飛ばされ際に右耳を裂傷。と一語岡さん。「山岳部同期生の牧野恵子さん

が、西穂高岳登頂したのは計46人。集団登山のあり方や気象判断をめぐつてさまざまな議論があったが、県は引率者の過失責任は問わなかつた。

松本深志高生の西穂高岳遭難 1967年8月1日午後40分ごろ、松本深志高2年生が十回目の慰靈祭に参列する。黙とうの後、同校に伝わる「祝記念祭」(57)は事故の際、登山による鎌田潤さん(57)は事故の際、重傷を負つた。集団登山に参加したのは、引率教師5人を含む計55人だった。

松本山までも見渡せる真東側斜面の岩場で行つた。背中から右足にかけた。雷が走り、はじき飛ばされ際に右耳を裂傷。と一語岡さん。「山岳部同期生の牧野恵子さん

が、西穂高岳登頂したのは計46人。集団登山のあり方や気象判断をめぐつてさまざまな議論があったが、県は引率者の過失責任は問わなかつた。

松本深志高校の落雷遭難事故から40年。北アルプス・西穂高岳独標で行われた追悼式=1日前11時20分

松本深志高生の西穂高岳遭難 1967年8月1日午後40分ごろ、松本深志高2年生が十回目の慰靈祭に参列する。黙とうの後、同校に伝わる「祝記念祭」(57)は事故の際、重傷を負つた。集団登山に参加したのは、引率教師5人を含む計55人だった。

松本深志高校の落雷遭難事故から40年。北アルプス・西穂高岳遭難 1967年8月1日午後40分ごろ、松本深志高2年生が十回目の慰靈祭に参列する。黙とうの後、同校に伝わる「祝記念祭」(57)は事故の際、重傷を負つた。集団登山に参加したのは、引率教師5人を含む計55人だった。

一日午後二時半、松本深志高校の西穂高岳遭難碑前で、今年も遺族や同窓生在校生ら約百人が参列して慰靈祭が開かれた。一人の命を奪った落雷遭難から四十年。この日参列した遺族は八家族十一人。亡くなつた生徒の親たちも多い。引率した教師たちも当然現役から退いている。高校二年で亡くなつた一人と同期生だった私も慰靈祭に参列した。

(大西 健文)

あの日、悲報を知ったのは夕方。激しい雷雨で家に飛び込み、テレビのスイッチを入れる。友人の名前が画面に流れている。学校に駆けつける。重苦しいう音風景の中、新たな情報は入らず、最終電車で大町市の自宅へ引き返した。翌日は朝から学校に待機。午後二時ごろ、自衛隊ヘリでシユラフした堀江久美乃さん(81)、松本市員が私たちと一緒にには卒業できな

た。ある仲間は「忘れてる」と、「あの日」を語らない。悲惨な現場。数秒の差で分かれた生と死。四十年の歳月は流れても、「あの日」は重くのしかかる。

担任で登山の引率者でもあった横内岡(あさら)さん(73)は松本市筑摩(つくま)は、私たちを卒業させるため、飯田高校に赴任。その後には三十代半ばで教職から身を引いた。場所は変わつても、子どもたちを教えていくと、「亡くなつた生徒の顔をアブつて見えた。そんな気持で教師を続けるわけにないかなかつた」。いまは幼稚園長として幼い子どもたちを見守

た。ある仲間は「忘れてる」と、「あの日」を語らない。悲惨な現場。数秒の差で分かれた生と死。四十年の歳月は流れても、「あの日」は重くのしかかる。

担任で登山の引率者でもあった横内岡(あさら)さん(73)は松本市筑摩(つくま)は、私たちを卒業させるため、飯田高校に赴任。その後には三十代半ばで教職から身を引いた。場所は変わつても、子どもたちを教えていくと、「亡くなつた生徒の顔をアブつて見えた。そんな気持で教師を続けるわけにないかなかつた」。いまは幼稚園長として幼い子どもたちを見守

た。ある仲間は「忘れてる」と、「あの日」を語らない。悲惨な現場。数秒の差で分かれた生と死。四十年の歳月は流れても、「あの日」は重くのしかかる。

担任で登山の引率者でもあった横内岡(あさら)さん(73)は松本市筑摩(つくま)は、私たちを卒業させるため、飯田高校に赴任。その後には三十代半ばで教職から身を引いた。場所は変わつても、子どもたちを教えていくと、「亡くなつた生徒の顔をアブつて見えた。そんな気持で教師を続けるわけにないかなかつた」。いまは幼稚園長として幼い子どもたちを見守



## 今も語りかける11人の仲間

西穂高岳遭難慰靈碑に献花し、手を合わせる遺族(左)・松本市の松本深志高校生徒(右)。堀江久美乃さんは、十年前に夫にも立たれ、いまは一人暮らし。『おなかがすいた』という声で寝床から飛び起きたことがあります。夫ではなく、成幸の声で…。まだあの子は成仏できないのだと

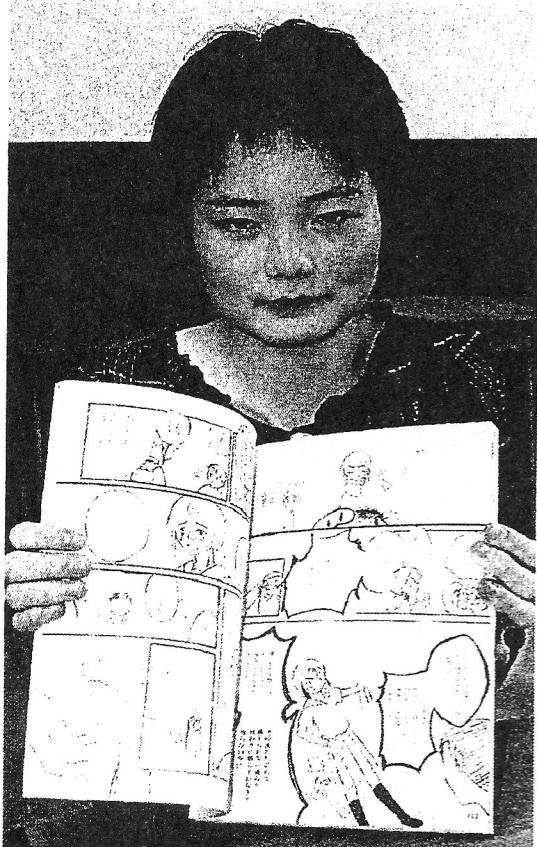
成幸君と私は同級生であり、同じ部活動の仲間だつた。私たちのクラスから登山に参加したのは七人。五人が死んでしまった。重傷を負つた人は、五年後で進級できず、残る一人は卒業。命を絶つた。七人の級友全員が私たちと一緒に卒業できなかった。八年の歳月は流れても、「あの日」は重くのしかかる。

担任で登山の引率者でもあった横内岡(あさら)さん(73)は松本市筑摩(つくま)は、私たちを卒業させるため、飯田高校に赴任。その後には三十代半ばで教職から身を引いた。場所は変わつても、子どもたちを教えていくと、「亡くなつた生徒の顔をアブつて見えた。そんな気持で教師を続けるわけにないかなかつた」。いまは幼稚園長として幼い子どもたちを見守

第三種郵便物認可

11

# 命の尊さ漫画で



近で一九六七(昭和四十二)年八月一日に起きた松本深志高校生らの落雷遭難を風化させたくない、同校三年生の滝沢輝己(てるみ)さん(17)が事故をテーマにした漫画を描いた。一人が死亡、十三人が重軽傷を負った遭難を「多くの人に知つてほしい、命の尊さを考えてほしい」との願いを込めている。

作品は、文化祭の準備で校内に泊まり込んでいた男子生徒が四十年前にタイムスリップし、遭難事故で亡くなった生徒の遺体を講堂で迎える「お別れ式」に立ち会つたという内容で、約三十六。

滝沢さんは漫画研究会に所属しており、作品は七月の文化祭で部員の作品を集めて発表した冊子に

報告書を読んだ。落雷現場の様子などを記した生々しい内容にショックを受け「指先から血の気が引いた」という。報告書

## 松本深志高の落雷遭難 生徒が作品に

では、負傷した生徒の中見つけた。岡潤一さん(57)の名前も

に同校の社会科教師、鈴井潤一さん(57)の名前も

では、負傷した生徒の中上げた。

井泉水さんが亡くなつたことでも作品に影響したといふ。「人はいつ死んで、「もうと詳しく知りたい」と、市中央図書館で同校がまとめた事故別れ式」に立ち会つたと

今、在校生の間で、事故が話題になることはほとんどない。滝沢さんは、「人はいつ死んでおかしくないと実感した。私は事故の体験者ではないけれど、自分なりに命の尊さを伝えられればと思った」。作品の終盤で登場人物に「命を落としてしまう可能性は全(すべ)ての人々に等しくあります。つまずいても傷ついても今のこの瞬間を大切にしていく」と語らせている。

一日に独標で行われた追悼式に参加した鈴岡さんは、「亡くなつた仲間や集まつた同期生に漫画のことを報告した。事故を知らない世代が命の重みを受け止め、事故の記憶を受け継いでくれるところが嬉しい」と話している。

## 3年生の滝沢さん 報告書に衝撃 風化させない

に伝えたい」と考え、鈴岡さんから体験を聞き、アドバイスも受けながら、約二ヶ月かけて描き

松本深志高校の落雷遭難事故をテーマにした漫画を描いた滝沢輝己さん

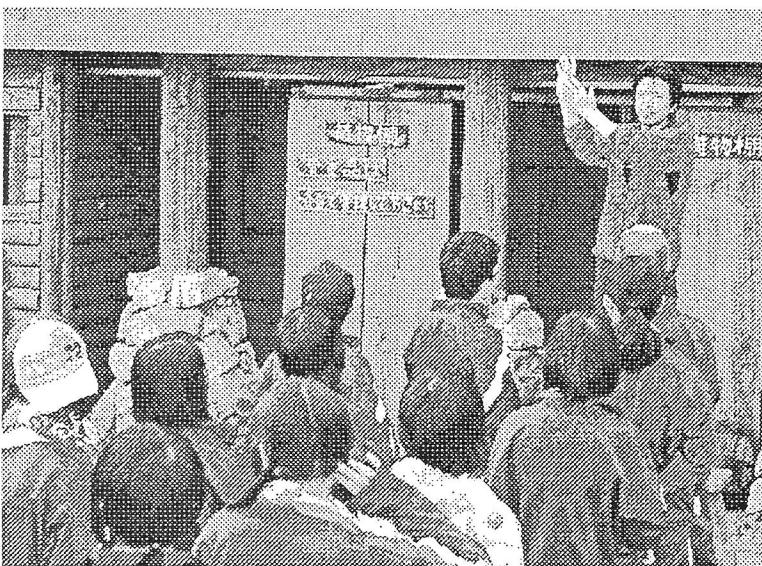
第三種郵便物認可

信濃毎日新聞

中便 南信

## 北アルプス山小屋を訪ねて

## 西穂山荘



学校登山の中学・生徒に山の美しさや歴史を説明する粟沢さん=7月24日

「厚い雲ではないから、まだ雷雨の心配はない。でも早めの行動に越したことはないですよ」。七月二十五日午前、北アルプス西穂山荘の支配人粟沢徹さん(45)は上空を見ながら、奥穂高岳へ向かう登山者たちに助言した。

一九六七(昭和四十二)年八月一日、西穂高岳独標付近で起きた松本深志高校の落雷遭難で、山荘は負傷した生徒や引率者の収容先になった。

社長の村上文俊さん(40)「松本市は同じ六七年の九月生まれ。事故に対応した祖父の守さん(故人)、二代目で父親の健一さん(67)から遭難の話を繰り返し聞いてきた。気象遭難を後世に語り継ぐのは象徴的だ」と語る。

この小屋の責任。スタッフ研修の初めには必ず事故の概要を説明する。

この四十年で、山荘周辺は変わった。七〇年に岐阜県側に新穂高ロープウェイができ、独標まで二時間余で行くことができる。近年は团塊世代の退職と中高年の登山アーバンが重なり、登山者も増えた。

「その分、不十分な装備のままの登山者も目につくようになつた」と、九二年から支配人を務める粟沢さん。昨年、奥穂高岳から縦走してきた二人組が午前二時に山小屋に到着したこともあった。「夜は足元が危険なのでビバークしない」と言い返す人がいる。

## 語り継け「風化させぬ」

松本深志高校の西穂高岳落雷遭難事故 1967年8月1日午後1時40分ごろ、松本深志高校生46人が西穂高岳山頂から下山中、独標付近(2,701m)で落雷に遭い、生徒11人が死亡、生徒と引率教師13人が重傷を負つた。

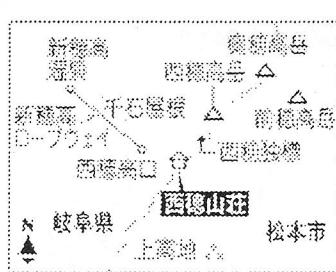
粟沢さんは山の魅力を語ることも忘れない。「山の美しさや自然のエネルギーを感じてほしい」。七月二十四日、学校登山で山荘を訪れた長野市東北中の二年生たちにそう呼び掛けた。「山は人間の高慢さを正してくれる。厳しさも山の魅力」と話す。

周辺では毎年、遭難者が出てる。地元遭難対協に所属する粟沢さんはなぜ山に登るのかと嘆く遺族に、「命を捨てるためではなく、前向きに生きるために登るのです」といつた内容の手紙を送つて励ますこともある。そのたびに「深志の事故を風化させてほいわない」と強く思う。

落雷遭難事故で負傷した一人で、今は松本深志高校の教壇に立つ鈴岡潤一さん(58)は、文俊さんや粟沢さん(58)を知る。「当時は建物も人も変わったが、事故の記憶は引き継がれている。感謝しています」

莊のホームページにも周辺の気象情報を載せ、入山者への注意喚起を怠らない。

(島田周)



西穂高岳(2,909m)への登山路上、岐阜、長野県境にあり、西に岐阜県飛騨地方、東に松本市上高地が望める。村上文俊社長の祖父の守さんが1941年に開設。90年に火事で焼失したが、92年に再建した。北アルプス山小屋で唯一、通年営業している。定員は約250人。